唯識における輪廻転生観について

宗務院にて　平成 16 年 11 月 26 日

岩　田　諦　靜

1章　一般的輪廻と解脱の話（こと）

1．輪廻のサンスクリット語は samsara（サンサーラ）である。原意は流れることを意味します。③流転、②輪廻転生。①生死輪廻。生あるもの（衆生、有情）が生死を繰り返すことをいう。衆生が迷いの世界に生まれかわり、死にかわって、車輪のようにとどまることがないこと。

解脱しない限り、生ある者は迷いの世界である三界六道（五道）を輪廻しなければならいと考えられていた。

2．輪廻転生の原因として、一般には身・口・意の三業による。①身業＝身体的な行為。②口（語）業＝言語的な行為。③意業＝精神的な行為。これらによる因縁生起のものである。

3．解脱の為の行為として、五戒と六波羅蜜が説かれる。

4．輪廻の主体として、各学派それぞれにある。唯識では阿頼耶識である。

○　輪廻転生としての身・口・意の三業であり、その結果として三界六道（五道）及び人間界・天上界をも輪廻する。

5．三世両重の輪廻と十二因縁

○　原因と結果が二重になっていることから三世両重の因果という。

①　過去世（原因）→現在世（現世・原因）→未来世（結果）

②　三世と十二因縁

「過去世」―無明・行（原因）→（結果）識・名色・六入・触・受＝「現在世」＝愛・取・有・（原因）→（結果）生・老死＝「未来世」。　十二因縁の説明。

6．十界の名称

①　地獄、②餓鬼、③畜生、④阿修羅、⑤人間、⑥天人、⑦声聞、⑧縁覚、⑨菩薩、⑩仏。

○　三界六道（五道）、三界とは欲、色、無色界。五道は阿修羅を加えない。

2章　唯識説の系譜略伝

○　釈尊年代。宇井伯寿説、紀元前約４６６―３８６。中村　元説、紀元前約４６３―３８３年。

○　初期唯識説の人々。

弥勒（約２７０―３５０）、無著（約３００―３８０）、世親（約３２０―４００、加藤純章説（約３５０―４３０）、干潟竜祥説（約４００―４８０）。陳那（約４００―４８０）、無性（約４００―５３０）、護法（５３０―５６１）、戒賢（５２０―６４５,１２５才寂）、玄奘（６０２―６２９出―６４５帰―６６４）、窺基（６３１―６８２）。（法相宗）

○　真諦（４９９―５４６入―５６９）（摂論宗）、第九阿摩羅識の創造者。

○　所依経典。解深密経３巻。

○　論書類。瑜伽師地論１００巻（解深密経を含む。但し、弥勒作、研究グループの編纂）。摂大乗論釈１０巻（摂大乗論世親釈）。真諦訳の世親釈によって摂論宗がある。唯識三十頌（世親作）。成唯識論１０巻（唯識三十頌をインドの学僧１０人の注釈を編纂したもの。但し、護法の唯識説を正義として、玄奘と窺基によって編纂したもの。）法相宗所依論書。

3章　唯識における輪廻転生

1．八識の構造

（六処）	（六根）	（六識）	
① 色	眼根	眼識（第１識）	第三能変
② 声	耳根	耳識（第２識）	
③ 香	鼻根	鼻識（第３識）	
④ 味	舌根	舌識（第４識）	
⑤ 触	身根	身識（第５識）	
⑥ 法	意根	意識（第６識）	

末那識（第７識）—第二能変
阿頼耶識（第８識）—第一能変

前六識（第三能変）了別境識—有間断
第七識（第二能変）思量識—有間断、無間断
第八識（第一能変）異熟識—無間断

○ 五位百法—八識を心王と称する。
○ 身体とは五蘊が集まったもの五蘊身であるという。色蘊（物質的なもの）。受蘊・想蘊・行蘊・識蘊（精神的なもの）。
○ 一般的には心は表層から深層へと働くと見なしている。これに対して、唯識説では心は深層（第１能変）から表層（第２、３能変）へ働くものと考えるという特色がある。この点が他の仏教の教理と異るところである。万法唯識、唯識不離識といわれる。
○ 唯識説では輪廻の主体は阿頼耶識である。阿頼耶とはサンスクリット語でアーラヤ alaya で蔵とか宅と訳される。しかし、この蔵識には多くの「こころ」（心意識）の働きを付加することから音訳が用いられ、多くの異名がある。阿頼耶識の異名、①心、②阿陀那（執持）、③所知依、④種子識、⑤阿頼耶、⑥異熟識、⑦無垢識
○ 阿陀那 adana は執持の意味である。真諦の唯識説では第７識とされる。

２．輪廻の原因としての四根本煩悩

（唯識三十頌第６偈）〔第７末那識は〕四の煩悩と常に倶なり。謂く我癡と我見と辨に我慢と我愛となり。及び余（隨煩悩）と触等と倶なり。有覆無記に摂めらる。

注釋。此の四ついい、常に起て内心（第７識）を擾濁し、外の転識（第６識）を恒に雑染に成らしむ。有情は此に由て生死に輪廻しつつ出離すること能はず。故に煩悩と名づく。（成論第四）

◎ 我癡＝無明である。諸の理事において迷闇であって明瞭なる決択のないことをいう。無我の理に迷って我の相にくらいこと。一切の煩悩の根本。無明には相応無明（前六識にある）と不共無明がある。不共無明は独行不共（第６識と第７識にある）と恒行不共（第七識がある）
◎ 我見＝有身見のこと。見には正見と悪見があり。五悪見（身見、辺見、邪見、見取見、戒取見）の一。我見は顛倒の推度をする。五蘊和合を縁じて、妄に常・一の我身と執することをいう。我執のことで有身見のこと。
○ 我見は分別起の煩悩と倶生起の煩悩による。分別起は生まれたあと起る後天的なもの。倶生起は生まれながらに倶っているもの。分別起（第６相応）、倶生起（有間断・第６相応。無間断・第７相応）
○ 分別起とは邪師、邪教、邪思惟の縁により、分別計度（種々の差別の事を推度する）して起る。後天的な麁大なる惑。疑と邪見と、見取見と戒禁取見の四。十煩悩の中の四。倶生起とは任運に一身と倶生する惑。他の６煩悩と２０隨煩悩。有間断（第６識）、無間断・恒相続（第７識）がある。
◎ 我慢とは所執の我を恃（たの）みて、心を高ぶらせること。自他を比較して他を軽蔑しみずからを恃（たの）み心が高ぶり挙ること。七慢の中の一。①慢、②過慢、③慢過慢、④我慢、⑤増上慢、⑥卑慢、⑦邪慢。

◎ 我愛＝我貪である。所執の我のうえに深く耽著を生ずること。

○ 有覆無記＝第７末那識の性質。善・悪・無記の三性。第７識は恒審思量識（恒に審に思量する識）。恒にとは不断に相続する（第８識の見分）。審にとは深明に計度（分別）する（第７識のこと）。第６識は時に審（計度・分別）があるが恒の義はない。前五識には計度・相続共にない。

○ 第８阿頼耶識は無覆無記である。完全な中容（中性）ということである。

３．輪廻主体としての阿頼耶識

『成唯識論』巻三、和本八、大正蔵３１－１３ｂ

阿頼耶識をば断とせんや、常とせんや、断にも非ず、常にも非ず、恒に転ずる以ての故に。恒と云うは謂く、此の識は無始の時より来た、一類（無記）に相続して常に間断無し（無間断）と云わんとすること、是れ〔三〕界・〔五〕道・〔四〕生とを施設する本なるが故に、性堅にして種〔子〕を持して失せざらしむが故に。

転（常・一を庶す）と云うは謂く、此の識は無始の時より来た、念念に生滅して前後変異すと云わん。因滅すれば果生ずるを以て常・一に非ざるが故に。転識の為に種〔子〕を熏成する可きが故に。

恒と言うは断を遮す。転と云うは常に非ずと云うことを表わす。猶ほ暴流の水の断にも非ず、恒にも非ずして相続して長時に漂し・溺する所ろ有るが如し。此の識も亦爾なり。無始従り来た、生滅し相続して、常に非ず、断にも非ずして、有情を漂・溺して出離せざらしむ。（成論巻三）。

語意。一類＝善・悪・無記の無記のこと。施設とは因果のこと。安立のこと。転とは常・一を遮す。恒とは断に非ず。性堅とは相続の義を顕わす。自性と我とを簡ぶ。漂とは人・天に生ずること。溺とは悪趣に居す。

４．心の継続的存在と内含する性格（種子識。第八阿頼耶識の因相）

○ この識は諸法の種子（しゅうじ）を執持して、諸法生起の原因となる。種子を執持することによって現行する。

○ 種子は第八識中に摂在されたもので、諸法各自の現象を生起させる作用である。諸法各自の親因となる。現行の諸法の熏習によって成される気分であることから習気（じっけ）ともいう。種子には次の種子の六義がある。この六義は万有の原因たるものである。穀類などがその種子（しゅし）から生ずるように、物心すべての現象を生ぜさせる因種となるもの）。

○ 種子の六義（心の相続の条件）

１．刹那滅―心は有為であることから刹那刹那に生滅変化しなければならない。（如来性、仏性を否定する）。

２．果俱有―主観的な顕現（因）と客観的な顕現（果）は同時に俱存する。

３．恒隨転―恒に同類のものとして相続する。

４．性決定―善・悪・無記の性格は決定していて途中で変化しない。

５．待衆縁―諸縁の和合によって生ずる。

６．引自果―善の心法（因）から善の心法が生ずる。但し、善の心法（因）から善の色法（果）は生じない。

○ 種子の二種。本有種子は無漏種子であり、先天的ものであり、本性住種という。新熏種子は有漏種子であり、後天的ものであり、習所成種ともいう。

○ 五姓各別は種子の六義と本有種子、新熏種子による。本有種子（無漏）のない有情は成仏できない。①菩薩定姓（成仏）、②独覚定姓（不成仏）、③声聞定姓（不成仏）、④不定種姓（成仏）、⑤無性有情（不成仏）。

○ 善・悪・無記の三性。善因は善果を生じ、悪因は悪果を生ずる。等流因果。法相唯識の正義

は異熟因果である。そのことを因是善悪、果是無記という。無記に２種がある。有覆無記（第７末那識）と無覆無記（第八異熟識＝阿頼耶識）。

○ 第八識は輪廻の主体としてこれらの種子を永遠に執持しつづけることになる。

○ 種子（心）は種子生現行、現行熏種子、三法展転（ちんでん）因果同時として相続する。ローソクによる炷と焔の例がある。

○ 種子生種子は因果異時のことである。

○ 有情の輪廻を種子の方から考えると、有情の心の相続は種子の六義にのっとり、本有・新熏の種子の新しい熏習を受けて、さらに善・悪・無記の三性における無覆無記の己のとして相続するもののようであると考えられる。

5．総報の果体（異熟識。第八阿頼耶識の果相。）

○ 初めに阿頼耶識なり。異熟識なり。一切種なり。（中略）、是れ無覆無記なり。（２，３偈より。成論二）

○ 〔異熟識〕此は是れ能く諸の〔三〕界と〔五〕趣と〔四〕生とを引く。善・不善の業が異熟果なるが故に、説て異熟と名く。（成論二）

○ 異熟習気を増上縁と為して第八識を感ず。引業の力に酬うて恒に相続するが故に、異熟（真異熟）の名を立つ。前きの六識を感ず。満業に酬いたるは、異熟に従り起るをもって異熟生と名づく。（成論二）

○ 眼等の六識の業に感ぜられたるは、猶、声等の如し、恒に続するものに非ざるが故に、是れ異熟生なるべし、真異熟には非ざるべし。定んで真異熟の心有って、牽引の業に酬いて、遍して、断ずることが無くして、身器を変為し有情の依と作ると許す応し。（成論三）

○ 異熟とは善・不善（悪）の業因によって感得した有情の総報（総報・別報）の無記（有覆・無覆）の果体（五蘊身）のこと。

○ 異熟の三義

① 変異熟＝因はそのまま果となるのではなく何等かの変異（変化）があってなる。穀・麦など。

② 異時熟＝因と時を異にして、その果が成熟する。今世に業を造って、来世に果を引くなど。

③ 異類熟＝因と性類を異にして、その因の力に酬うて成熟する果である。（正義）

○ 性類とは善・悪・無記の三性のこと。異熟は善・悪の業を因として感ぜられたもので、その果は必ず無記に限るものである。因是善悪、果是無記と称されている。異熟因異熟果（正義）は同類因等流果と異る。

○ 異熟は三界・五趣（道）・四生を引くもので、善・悪の業が異熟果であるという。異熟を真異熟と異熟生とにわける。

○ 真異熟＝有情総報の果体たる第八識をいう。真異熟を感ずる業を引業という。総報を牽引することから引業という。

○ 異熟生＝第八識から生ずる前六識の異熟果たる貴賤・苦楽・賢愚・美醜等いわゆる別報をいう。異熟生を感ずる業を満業という。別報を円満ならしめるより満業という。

○ 四生＝胎生、卵生、濕生、化生。

○ 私考。過去世から一類（無記）に相続（連続）してきた無覆無記である真異熟による引業によって、現在世にその果報として、異熟識（阿頼耶識、真異熟、異熟生）としての有情（五蘊身）を総報の果体として今世に執持（阿陀那）するのである。今世で新しく能熏・所熏の現行（四煩悩等）による果報を感得する。今世において五蘊身（身体）が滅す時に、今世の業（善悪）の果報としての新しい真異熟の心を引業として、その人は執持して、次の未来世へと転生する。これを仏に成るまでくり返す、と考えて見てはどうでしょう。

6．死と転生

1．（成論巻三）、また将に死せんとする時には善悪の業に由って上下の身分に冷の触漸く起る。若し此の識無むんば彼の事成せず。

2．（真諦訳・摂論世親釈巻三）。

論曰。復次に、若し人、已に善業及び悪業を作さば、正しく寿命を捨て、阿黎耶識（五蘊身）を離るるときは、或は上より、或は下より次第に依止の冷触することは、応に成ずることを得べからず。

釈曰。若し人、世間の中に於て、不殺生等の十善業を作さば、決定して応に人天の生報を得べし。若し殺生等の十悪業を作さば、決定して応に四趣の生報を得べし。是の人、死時の中に於て、若し善業有らば、定んで応に上に向うべく、若し悪業有らば、定んで応に下に向うべし。若し汝、本識有ることを信ぜざれば、云何が此の依止の身（身体）は、或は下より冷触し、或は上より冷触する、次第を成ずることを得るや。本識若し捨すれば、依止の身は所捨の処に隨って、冷触次第に起り、所捨の処は、則ち死身を成す。

○ 真諦訳だけにある意見。十善業を行った人は人間界と天人界に生ずる。十悪業を行った人は、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅の四趣（四道）に生ずる。

7．その他、参考として、日蓮聖人遺文より。

○ 開目抄より。引業と申すは仏界までかはらず。日本・漢土の万国の諸人を殺すとも五逆・謗法なければ無間地獄には墮ちず。余の悪道にして多歳をふ（経）べし。色天に生まるること、万戒を持てども不善を修すれども、散善にては生れず。又梵天王となる事、有漏の引業の上に慈悲を加へて生ずべし。（定、６０４頁、成論二、和本１２頁）。

○ 観心本尊抄より。天親菩薩の唯識論に云く、謂く余の有漏と劣の無漏の種とは金剛喩定現在前する時、極円明純浄の本識を引く。彼の依に非ざるが故に皆永く棄捨す等云云。（定、７０８頁、成論十、和本８頁）。

○ 妙法尼御前御返事より。法華経の名号を持つ人は、一生乃至過去遠々劫の黒業の漆変して白業の大善となる。いわうや無始の善根皆変じて金色となり候なり。しかれば故聖霊、最後臨終に南無妙法蓮華経ととなへさせ給ひしかば、一生乃至無始の悪業変じて仏の種となり給う。（池上本門寺蔵、定１５３５頁）。

8．解脱についての説明。（成論より）

○ 成論。或は真異熟の因と果とは、皆本識に離れずということを顕示せんが為に、故（かれ）現をば説かず。現の異熟因は、即ち与果するものにはあらず。
転識は、間断するをもって、異熟に非ざるが故に。
前中後際（過現未）に生死に輪廻することは、外縁をば待たず、既に内識に由るといひぬ。
浄法の相続することも、応に知るべし亦然なり。謂く、無始より来、本識に依附して有らゆる無漏の種いい、転識等の数数（そくそく）熏発するに由って、漸漸に増勝になる、乃至、究竟じて仏を成る時を得（う）る時には、本来の雑染の識種を転捨し、始起の清浄の種識（有漏の種子識）を転得して、一切の功徳の種子を任持する、本願の力に由って未来際を尽して、諸の妙用を起しつつ、相続して窮まること無し。（成論八）

追加資料

○ 有情の相続としての輪廻

（１９偈）諸業の習気と二取の習気と倶なるに由って、前の異熟既に尽くれば、復余の異熟を生ず。

この偈頌は有情が三界を生死流転することについて説いている。それに四説がある。

第１説。福業、非福業、不動業の種子による説。

第２説。名言、我執、有支の三種習気による説。

第３説。十二有支（縁起、因縁）による説。二世一重説。

第４説。分段、変易の生死による説。

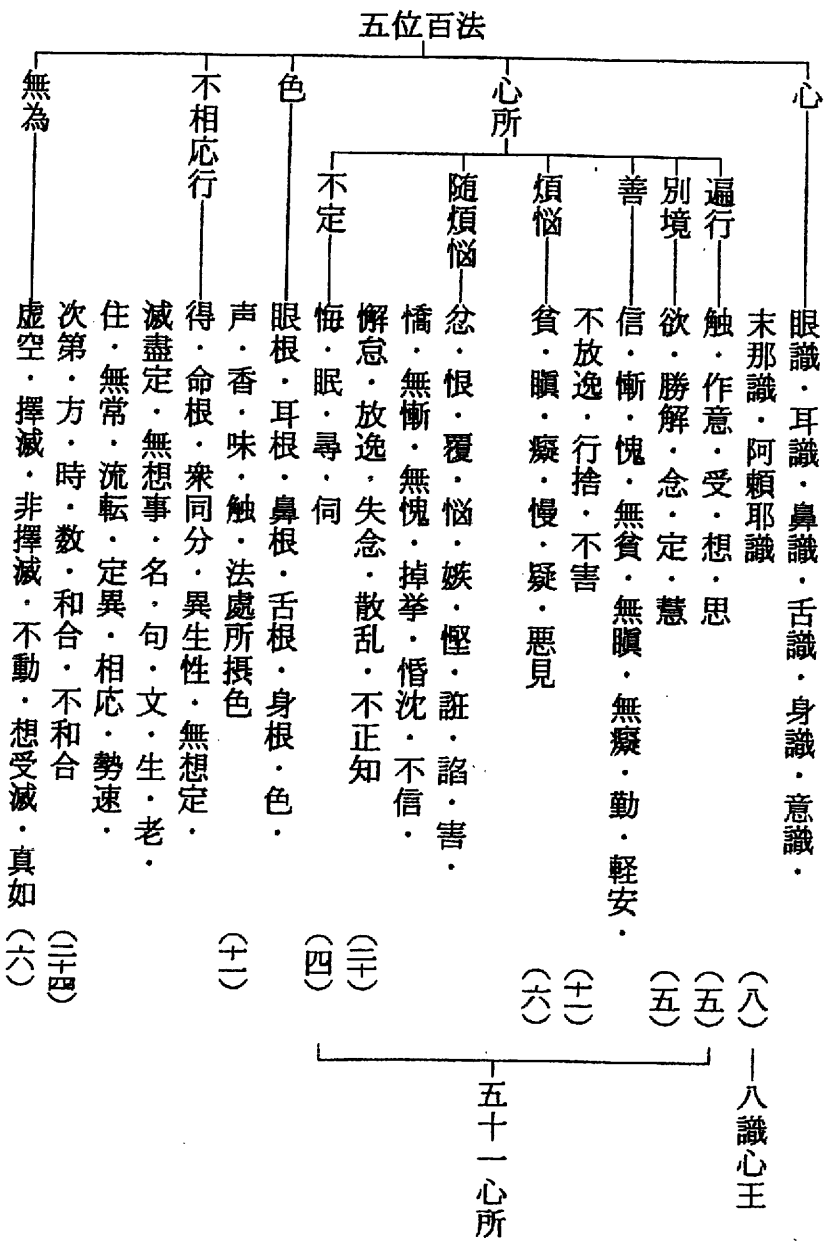
　この中で、第二説が中心。唯識説における十二有支（因縁）の輪廻説は二世一重説である。

① 過去・現在の二世にかかわる説。

無明・行（能引支）、識・名色・六処・触・受（所引支）、愛・取・有（能生支）を過去世の十因とし、現在世の二果の生・老死（所生支）がある。

② 現在・未来の二世にかかわる説

無明から有までを現在世の十因とし、生・老死は未来世の二果である。

唯識説では「すべての存在はただ心（識）のみから現われたもの」だと説きます。宇宙といえども識（心）を離れて存在するものではなく、心から現われたものとしてのみ認めています。その宇宙は事相と理性とから成り立っているとされます。その事相と理性との宇宙は五位百法であると説かれます。事相とは有為法としての現実的な現象的な面を主体として説いたものであり、理性とは無為法としての論理的な面を説いたものです。唯識説はあくまでも事相としての心の顕現を説くものです。五位百法とは心を大きく五位に分け、更にそれを百法（百心）に分けたものです。五位百法の五位とは（一）心王と、（二）心所と、（三）色法と、（四）不相応行法と、（五）無為法とであります。唯識説は心王、心所、色法、不相応行法の四法の有為法を中心にして説いています。心王には八識があり、心所には五十一の心所があり、色法には十一の色法があり、不相応行法には二十四の不相応行法があり、無為法には六の無為法があるとされています。心はこの五位百法により構成されている宇宙ということになります。

参考のために五位百法の分類の図表を示すと次のようになります。